

論文題目： 中島敦と〈南洋〉—同時代〈南洋〉表象とテキスト生成過程から—

氏名： 杉岡歩美

博士論文要約

中島敦は明治四十二年に生まれ、昭和十七年に三十三歳という若さでこの世を去った。

中島は、国語編修書記の仕事に従事した〈南洋〉から昭和十七年三月十七日に帰国後、亡くなるまでの凡そ八ヶ月間に多くの作品を書き上げている。中島の盛んな創作意欲は、直前まで〈南洋〉に赴いていたことから、〈南洋行〉にその理由の一端を求めることができよう。中島が赴任した昭和十六年当時、〈南洋〉とは一九二〇年のヴェルサイユ条約締結によって日本のC式委任統治領に置かれたミクロネシア三群島（マリアナ、カロリン、マーシャル）を指した。現在発行されているパラオ国立博物館のパンフレットにも、一八八五年にスペイン、ついでドイツに領有されたことが記され、日本統治時代の解説には、「日本統治時代（1914—1945年）は31年間に及び学校教育や産業開発などを通してパラオに強い影響を及ぼしました」と記されている。

〈南洋〉は、「学校教育」などを通じ現地人を「文明人たらしめんとす」ることを主たる目的に統治されていた。〈南洋〉は、日本による「学校教育」の「強い影響」下にあった土地であった。こうした〈南洋〉に中島は向かい、まさにこの「行政的中心」としての南洋庁に国語教科書編纂のため勤務した。現地人への「国語教育」に携わるといふ仕事は、おそらく中島に「文字」の権力性を意識させ、また自らが〈文明人〉であることを再認識させたであろう。

中島の〈南洋行〉を通じた意識の変化は、〈南洋もの〉に結実したと考えてよい。

本論では、中島敦の〈南洋行〉での感慨が率直に描かれたとされる〈南洋もの〉、なかでも《環礁》作品を中心に取り上げ、特徴を考察し、その価値を再検討したい。

〈南洋行〉後に出版された第二著作集『南島譚』（昭和十七年十一月十五日、今日の問題社）に中島の〈南洋もの〉が収録されている。《南島譚》の総題が付けられた「幸福」「夫婦」「鶏」、《環礁—ミクロネシア巡島記抄—》の総題が付けられた「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」、計九作品の、いずれも短篇である。なかでも《環礁—ミクロネシア巡島記抄—》（以下、《環礁》と略記。）は、「作者がパラオ島での生活で実際に眼にした所を誇張せずに書いた作品で、淡々とした文章の中にエキゾチズムの香りを悠々と放っている。」（郡司勝義「代表作品解題」、『李陵・弟子・山月記』所収、昭和四十二年一月十日、旺文社）と紹介されてきた。

第一部「〈南洋行〉と作家たち」では、中島敦、土方久功、久保喬、大久保康雄など〈南洋行〉作家を論じた。

第一章「〈南洋行〉と中島敦」では、中島にとっての〈南洋行〉の意味を探っていった。当時の〈南洋〉への教育について、琉球大学図書館所蔵の、矢内原忠雄資料（主に、矢内原が作成した「南洋群島島民教育に関する質問書」への回答）を取り上げ、「文明」のないものに教育を与えることで「文明人」にしようという当時の政策を示した。久保喬の作品や、土方久功との比較を通して、彼等との相違点を抽出していく。〈南洋行〉は中島に「文明人」としての自己を再び認識させることとなる。しかし、中島の「島民」を「島民」として見る視線、つまり「不可解」なものとして他者を認める視線が、〈南洋行〉以降の中島文学に備わったと指摘した。

第二章「中島敦〈南洋行〉と大久保康雄「妙齡」」では、中島が〈南洋行〉の最中、懇意になった南洋庁職員・竹内虎三の〈南洋〉での詳細を示した。当時の中島の書簡に「風と共に散り(ママ)散りぬ」の記者、大久保康雄を案内し、たとあり、また、「大久保の南洋の小説」「妙齡」ついで、田中の送つて来たヤツ」を二冊手にしたことがわかっている。しかし、大久保康雄の「妙齡」が何を指すのかは不明だった。中島敦が実際に見た、大久保康雄の「妙齡」を、「島妻」と「流木」が掲載された『小説集 年輪Ⅰ』『小説九人集』（いずれも、大久保が所属していた同人組織「妙齡会」発行）だと呈示した。

第三章「大久保康雄〈南洋行〉—中島敦との接点を中心に—」では、第二章で明らかにした大久保康雄の短編小説および、同時に手に入れた連作を受け、諸作品の研究を行った。中島敦の〈南洋行〉はよく知られているが、大久保康雄の〈南洋行〉は従来論じられることがなかった。『風と共に去りぬ』の翻訳で一躍有名になった大久保康雄は、「作品ジャーナル」に「ノードホフ&ホール以上の南海もの」を書く約束で〈南洋〉に赴いている。

「ノードホフ&ホール」とはアメリカで活躍した作家であり、大久保自身が翻訳している。彼らの作品から大久保が影響を受けたことを、作品分析及び言説から読み取った。

第二部「中島敦の〈南洋もの〉」では、具体的の中島敦の〈南洋もの〉の作品分析を行った。

第四章「中島敦「真昼」論Ⅰ—〈南洋〉表象と作家イメージ—」では、《環礁》作品群がなぜ「私」の見た〈南洋〉という構図を取るのか、同時代の中島敦像を捉え、さらには〈南洋〉表象を把握した上で検討を加えていった。第二創作集『南島譚』が出版された昭和十七年頃の中島敦は今後を期待された新人作家であった。しかし、時局的な要請や同時代言説などから、〈南洋行〉前の作品「光と風と夢」は、「南方研究者」が描いた「白人」植民地主義への批判を含んだ時局的なテキストだと受け取られ、流通していった。そのなかで、敢えて、中島が〈南洋もの〉を書き上げたのは何故か。中島が〈南洋行〉後に著した作品、「真昼」は、〈西洋〉対〈南洋〉、〈日本〉対〈南洋〉との構図から、〈南洋〉に対立する存在として〈西洋〉と〈日本〉は同じ立場だとの認識がいとも簡単に創り出された状況を批評の射程に入れ、反〈西洋〉として立ち現れる〈南洋〉表象、そして反〈南洋〉から照射される〈日本〉を無効化することで、置かれたすべての枠組みを解体し、その序列化のなかに留まることを拒否していると読み取った。

第五章「中島敦「真昼」論Ⅱ—視座としての「真昼」—」では、まず〈南洋もの〉の生成過程に注目する。生成過程から、当初は《南島譚》と《環礁》とが混在していたこと、さらに《環礁》生成の際に、中島が作品配列に拘った様子が窺える。中島には諸短篇を《南島譚》と《環礁》に振り分ける意識があり、《環礁》においては掲載順も大切であったことがわかる。「ナポレオン」と「鶏」の移動に伴って起こった配列の変化は、「ナポレオン」と「マリヤン」が並べられた点、そして、その間に「真昼」が挟まれた点である。「真昼」が、『南島譚』刊行の際に新しく収録されたことが非常に重要になってくると考え、「真昼」の構造を分析し、「真昼」が収録されることで起こる変化を問うた。「真昼」が収録されることで、新たな解釈の枠のなかに「ナポレオン」は置かれる。《環礁》作品は、「真昼」における「私」の〈まなざし〉を視座とした上で読み直されてよい。これはおそらく他の《環礁》作品にも同様にいえるだろう。中島の《環礁》は、「私」の〈まなざし〉によって〈南洋〉がどのように変質するのかを描く意図があったと考えた。

第六章「中島敦「夾竹桃の家の女」論—ピエル・ロティとの交錯—」では、ピエル・ロティの『ロティの結婚』と近い構図を持つ「夾竹桃の家の女」が、『ロティの結婚』を想起させる構図を敢えて敷いているのは何故なのか。草稿分析からも、中島が意図的にロティを想起させるような言葉を付け加えているさまを読み解いていく。「夾竹桃の家の女」は、『ロティの結婚』を下敷きにし、『ロティの結婚』を意識させるような装置を作りながら、最後に「昔の支那人の使った銀竹といふ言葉」を配置させることで、今まで描かれた、ロティに結びつけられた世界をひっくり返していることを明確にした。

第七章「中島敦《南島譚》論—〈病〉と〈南洋〉—」では、《南島譚》三篇（「幸福」「夫婦」「鶏」）を扱った。この三篇に共通するのは〈病〉である。三篇を通して、「島民」への「教化」という〈幸福〉観や、〈南洋〉島民の「不衛生」な「生活慣習」を見直し〈文明〉として〈治療〉するといった考えが幻想に過ぎないと示された。しかし、前近代的な〈病〉と〈治療〉のあり方は、「物語」内部にしか成立し得ないといった特徴も見られた。そして、「鶏」では、現代の〈南洋〉を舞台にし、民俗学者の「私」を視点に据えることで、「島民固有文化」を把握しようとする行為すら、「物語」化を免れない行為だと描き出されていると指摘した。

本論の試みは、資料や草稿、テキスト自体の細部に拘ることで、その生成過程から抽出できる概念を明らかにしていくことである。〈南洋もの〉を生成する過程で、「南洋ロマンス」といった概念を如何に中島がテキストに組み込んでいったのかを読み解いた。「南洋ロマンス」の導入によって現れる〈読み〉は、「南洋ロマンス」の肯定／否定といった二項対立すら無効化させていく。

戦時下に〈南洋もの〉が多く生産された事実からは、当時の〈日本〉の、〈西洋〉と同一化を目指した様が見出される。また、〈日本〉が〈南洋〉をどのように利用しようとしたかが見取れるだろう。戦時下に於ける〈日本〉と〈南洋〉との関係を問うことは、〈日本〉のあり方そのものを問うことにも繋がるのである。